

令和7年度 第3回横須賀市学力向上推進委員会 議事録

- 1 日時 令和7年10月28日（火）15時00分から16時30分まで
- 2 場所 横須賀市教育研究所 第2研修室
- 3 出席委員
笠原委員・西野委員・石井委員・安藤委員・太田委員・宇佐美委員
村上委員・小日向委員
- 4 事務局
渡辺主査指導主事・石橋主査指導主事・黒澤主査指導主事・東指導主事
大田指導主事・原指導主事
- 5 傍聴者 なし
- 6 議事内容
 - (1) 本委員会の今後の日程等について
 - (2) 答申に盛り込むべき内容について
 - ①本市が目指すべき「学力」とはどのようなものか
 - ②新たな重点目標の設定について
 - ③次期プランの進捗管理に相応しい指標について

- (1) 本委員会の今後の日程等について

■笠原委員長

本日は答申に盛り込むべき内容について協議を行いながら、最終的な確認も行いたいと考えている。協議に入る前に、今後の日程について確認する。事務局に説明をお願いしたい。

■事務局

資料1をご覧いただきたい。本日は、答申に盛り込むべき内容について資料2を用いて協議を進める。そして、12月8日に開催する第4回推進委員会で答申案を確認し、答申を決定したいと考えている。タイトな日程だが、協力をお願いしたい

■笠原委員長

今回は答申案を決定しなければならない。本日は議題も多くあるため、資料は事前送付された。特に今後の日程や進め方について質問や意見はあるか。(特になく、全委員、了承)

それでは、全員が日程については了承したものとして、次の議題に移る。

(2) 答申に盛り込むべき内容について

- ①本市が目指すべき「学力」とはどのようなものか
- ②新たな重点目標の設定について
- ③次期プランの進捗管理に相応しい指標について

■笠原委員長

資料2に、答申に盛り込むべき内容として示されている。本資料について、事務局に説明をお願いしたい。

■事務局

資料2の表に示しているものが全体の構成であり、裏面がその補足説明というような構成としている。この資料は、これまでの協議で委員の皆様が発言いただいた内容を笠原委員長がまとめてくださったものである。

本資料は、今後の推進プランに掲載するものではなく、本委員会の協議において活用するもので、これまでの意見を目標や指標に反映するための資料であると捉えてほしい。

この資料を活用しながら、諮問1に関して、学力を資質・能力ベースの考えに基づいて捉えること、横須賀市が目指す教育の姿に示されている資質・能力との関連を意識し、学校、家庭、地域が三位一体となって児童生徒の資質・能力を育成すること、という2点を確認したい。

また、諮問2に関しては、次期プランの重点目標を設定する上での方向性として「集団の育成」「個の力」「情報活用」「学びの土台」「豊かな経験」という視点を挙げている。この方向性でよいのか、意見を求めたい。

最後に諮問3に関して、進捗管理にふさわしい指標にするために必要なことについて意見を求めたい。

現行プランでは、1つの目標に対して複数の指標があった。これにより、様々な角度から分析することができた一方、成果と課題が整理しづらく、分析に時間を要してしまい、実践と結びつけるのが難しいという課題もあった。

これまでの議論を基に、進捗管理にふさわしい指標について、資料2に示したキーワードを基に、その内容と指標の数も含めて設定し直したい。

■笠原委員長

協議すべき内容を簡潔にまとめると、諮問1に関しては、学力についての整理と、学校、家庭、地域が三位一体となって児童生徒の資質・能力を育成する点の2つである。この点でよいか。

諮問2に関しては、次期プランの重点目標を設定する上での方向性として「集団の育成」「個の力」「情報活用」「学びの土台」「豊かな経験」という方向性についてである。これについては議論を求めたい。

諮問3に関しては、目標に対する指標の内容とその数について意見を求めたい。

はじめに、諮問1に関して協議する。諮問1は、現行プランの成果と課題を踏まえ、目指すべき学力とは何か、そして重点目標の指標の中で、横須賀市として学力をどう整理すべきかについてである。

この点についてはこれまでも繰り返し確認してきたが、資質・能力ベースで捉え直していくこと。これをどう整理するかについては、資料2で説明している。そして、三位一体で児童生徒の資質・能力を育成することについて意見を求めたい。

■太田委員

笠原委員長が、次期プランの学力の方向性についてまとめ、資質・能力ベースという形で、教員が新たに取り組めるような方向性を提示していただいたと考える。三位一体という視点から「つなげる・つながる」という言葉に横須賀市全体が一体となって取り組む姿勢が包括されており、賛成する。

■笠原委員長

感謝する。他に意見はあるか。各委員の自由な発言を期待する。

■宇佐美委員

同様に、前回までの話し合いで漠然としていた内容が明確にまとめられており、理解が深まった。よい内容であると考えます。

■石井委員

資料を拝見し、地域と家庭が学校と三位一体となっていく重要性を理解した。この後の議論にもつながると考えるが、地域と家庭との連携をどのよう

に進め、取り組みを伝えるかという点が重要である。諮問1に関しては、これで進めるべきであり、保護者にも理解しやすい内容であると考えてる。

■笠原委員長

感謝する。他に意見はあるか。

■小日向委員

図にさせていただいて、理解しやすい。図の位置関係について質問だが、諮問1における学校と地域と家庭の関係性について、学校や地域が上に位置にした意味合いはあるのか。

■笠原委員長

家庭が土台となる部分を示すため、1番下に配置した。学校と地域は人的、その他の資源を協力し、共有していく。家庭は学校に対しても地域に対しても関わるという発想である。安定感の有無について懸念はあったが、石井委員のこれまでの発言にも家庭が土台となるという考えがあったため、それを意識した位置関係になっている。

■村上委員

学校、家庭、地域が密接に連携することが資質・能力の育成につながるという点が明確に示されている。「つなげる、つながる」というキーワードにより、各現場でどのように連携していくかを具体的に検討したり、解釈したりして、新たなアイデアを生み出せる。学校として取り組みやすい、非常によい内容であると考えてる。

■笠原委員長

「つなげる、つながる」という視点は前回の村上委員が出したキーワードである。そこから構想を得た。ぜひ各学校でも取り上げてほしい。

家庭が土台となるという点において、それを重い責任と感じる家庭もあるだろう。しかし、家庭とどのように連携していくかについて、皆で考える必要がある。

■安藤委員

資料は分かりやすくまとめられていると感じた。学力という概念を資質・能力ベースで具体的に提示しており、「知識」「スキル」「情緒」そして非認知的な要素といった具体を示していただいたことにより、関係者間の共通認

識が深まると考える。

三位一体の形は、これまでの議論から考える最も望ましい形である。しかし、この答申を策定した後に、学校、地域の協力、家庭の連携をどのようにアナウンスしていくかという点は、今後の課題である。学校が努力するだけでなく、地域や家庭との連携を促進する方法を検討する必要がある。以上である。

■西野委員

各委員の意見に賛同する。横須賀市では学力の捉え方を「資質・能力ベースにする」という変更は、学校現場の教員は理解できるだろうが、保護者や地域の方々にとっては、「資質・能力」が何を示しているのかという疑問が生じる可能性がある。そのため、教育的な専門用語だけでなく、一般にも分かりやすい言葉を用いることで、資質・能力ベースの考え方がより浸透することを期待する。

■笠原委員長

各委員からの発言に感謝する。諮問1については、事務局案に対して各委員の了解を得られたと認識してよい。(各委員了解の意を示す)

次に、諮問2に関してである。重点目標を設定する上での方向性として「集団の育成」「個の力」「情報活用」「学びの土台」「豊かな経験」という視点を挙げたが、この方向性でよいのか、意見を求めたい。単によいか悪いかを問うのではなく、これら以外の視点や、別の意見があれば、それらも踏まえて、この4つの方向性と関連付けながら、事務局に意見を還元してほしい。

■村上委員

目標は分かりやすく提示されており、目標1と目標2が現行の学力向上推進プランを踏襲しているため、学校現場は理解が進む。しかし、目標3と4の区分について疑問がある。学習指導要領では、学習の基盤となる学力として情報活用能力が示されており、目標4に目標3の内容が含まれているように受け止める人もいるだろう。あえて目標3を独立させた意図と設定理由を説明願いたい。

■笠原委員長

目標4について説明する。裏面にも繰り返し記載されているが、家庭との連携を重要視している。家庭との連携は、家庭学習だけでなく、子どもたちの情緒的な育成や安定した生活を築くことも含まれる。そのため、学びの土

台という項目には、家庭との連携を強く意識している。家庭や地域の方々の協力を得て、基礎的・基本的な学力、すなわち義務教育9年間で学校教育が求める重要な内容の定着を図る。

また、横須賀市の特性として地域による家庭環境の多様性があるため、それらを網羅する目的で、あえてこの項目を設けた。

■村上委員

「つなげる・つながる」というキーワードの中に、そこを重視するために、あえてコミュニケーション能力を重視している説明があれば、より納得し、理解につながるものとなるだろう。

■安藤委員

目標3と4の違いについて、村上委員が指摘したように大枠では類似していると感じた。しかし、今の説明を聞いて目標4が家庭や地域との関連性を深め、生きるための基本的な力を養う目的であるならば、この目標で問題はないと感じた。しかし、一見両者の意味合いが重複しているように見えるため、学校での学習によって得られる基礎的な知識や技能がどのようにこれらの目標に組み込まれるかについて、さらに説明が必要だと考える。

目標3に情報収集と発信を入れることについては賛成であり、この4つの目標には納得している。しかし、目標3と4の明確なすみ分けについて、何らかの形で共有できればよりよい。

■笠原委員長

今後、より適切な言葉があれば伝えてほしい。目標を家庭や地域と共有していくときに、これは家庭が担える、地域が担えるということが必要だと考えた。そうでないと、全てが学校で育成するものと捉われてしまう。石井委員がこれまでも発言してきたように、目標の中で地域の大人が関われること、教育委員会が関われることが明確になっていると、児童生徒の資質・能力の育成に一体的に取り組もうという意識が芽生えると思う。石井委員に意見を伺いたい。

■石井委員

私も目標4に注視していた。これをどのように保護者や地域に伝えるべきかを考えていたが、今のところよりよい言葉は思いついていない。

話題が変わるが、横須賀市では不登校が多いという課題がある。そのような子たちが立ち直れる力をつけることや、学びの中に入っていけるようなこ

とも大切だと考える。

■笠原委員長

皆様の意見には説得力があり、全てを網羅したいと思ってしまう。しかし逆に言葉が多すぎると伝わらないということも危惧している。最終的には、学校の実情にあったもの、地域性を踏まえた文言で整理していく必要があるだろう。

■西野委員

目標が4つある中で、目標1と2は学校が担うもの、目標4については、これまでの議論だと家庭が担う割合が大きいものとする。目標3にある情報収集発信力を育成することは、これからの社会において重要なことと考えるが、全体を考えると目標3に地域が担う内容を設定することがよいのではないか。

■石井委員

質問である。目標の順番に何か意味はあるのか。

■笠原委員長

特に意味はない。目標1と2はこれまでの推進プランにあったものなので、そこに新たな目標3と4を加えてある。順位性も含めて意見があれば伺いたい。

横須賀市では、これまで様々な教育に関する取組をしてきた。過去には神奈川県内で先駆けてキャリア教育を実践したこともあったと記憶している。そのような市内の教育的資源を社会に「つなげる・つながる」という意識で児童生徒に提供する、大人と一緒に学ぶという取組もできるだろう。次期プランを考えるにあたって、児童生徒が持つ横須賀のイメージをもっと豊かにしていきたいと考える。

この目標は誰が担うかを明確に示すこともできるが、あえて説明の中で、学校の実情に合わせて家庭や地域に協力を乞うこともできるだろう。

■小日向委員

家庭、学校、地域のそれぞれが担う主な役割はあるが、例えば目標4の土台が家庭であることは理解したが、地域も学校もそれを支援し、学校内で担えることもあるだろう。これらはすべてつながり、互いに連携し合うべきである。したがって、提示された目標や指標についても、家庭、学校、地域の

いずれにも関連するような言葉に変更すべきである。

例えば目標 1 の「主体的・対話的」という指標は、学校に関係することだが、「自己肯定感」については家庭にも関連する。一方、目標 3 は学校のみが対象と感じられる。複数の対象に関連するような言葉を選ぶべきである。

目標 4 の「基礎・基本」という言葉は、家庭がその部分を担うならば「読み・書き」中心の家庭学習、といった狭い意味で捉えられてしまう可能性がある。また、「学びの土台となる」という言葉からは「計算」や「漢字」のような言葉を連想する。笠原委員長の意図を正しく読み手が捉えるためには「生活」といった語を加えて、もう少し広く解釈できるようにすべきである。

■笠原委員長

ご意見に感謝する。目標 4 に「生活」といった言葉を入れるべきだという意見をいただいた。他に意見はあるか。

■石井委員

確かに保護者は「基礎・基本」と聞くと、ドリルをやらせるといった学習をイメージしてしまうだろう。そうすると学力を資質・能力で捉えるといったことから外れてしまうように思う。

■笠原委員長

ご意見に感謝する。しかし、忘れてはならないのは、次のプランの目標や指標の検討材料の中に、全国学力・学習状況調査の結果が含まれているという点である。これまで言われてきた学力の基礎的・基本的部分についても資質・能力の一部と捉えながら、それらの力が確実に身に付いているかを測る指標を検討していかねばならない。基礎的・基本的という言葉を広く捉えるべきであり、全国学力・学習状況調査の結果も指標の 1 つとしていくなど、様々な検討が必要である。

■村上委員

目標 3 について、三位一体の中で、それぞれの役割を明確にすることではないということは理解した。

情報収集と発信する力について、誰に向けて発信するのかという点から考えると、学校内に留まらず、社会や地域への発信であってほしいと考える。その意味で「社会参画」といった言葉を押出ししながら、情報活用を通じて社会とつながっていくという視点があれば、よりバランスが取れるだろう。

例えば、「あなたが好き、私が好き、横須賀が好き」のメッセージにつながる目標が1、2、3と続き、目標4にもそうした意味合いを含めることができれば、よりスムーズな連携が期待できる。

■笠原委員長

感謝する。「社会参加」という視点である。まさに、これからの時代を支える上で重要である。他に意見はあるか。

■西野委員

石井委員の発言にあった「目標4を最初に示すこと」はよいと感じた。目標1、2は現行プランと同じなのであれば、現行プランの目標3が「学力層全体の引き上げを図る」となっているため、次期プランの目標3、4がそれに変わったと勘違いされる可能性がある。

また、「土台となる」という表現があるため、まずは土台から示すことがよいとも考える。現行のプランとの違いも鮮明になるのではないか。

■笠原委員長

目標の順番を考えるにあたって、認知的なスキルと非認知的なスキルを考慮した。認知的なスキルについては学校が関わることが大きく、非認知的なスキルについては、地域や家庭に関係することが大きい。

特に、今回の資質・能力ベースで学力を捉えると点においては、学習の中で非認知的なスキルが果たす役割が非常に大きいということを示していきたい。目標1や2がそれにあたる。順位性をつけたわけではないが、便宜的に目標1から4としている。この点は事務局にお任せすることになるが、このことについて、意見はあるか。

■小日向委員

順番を変えて問題がなければ、私も目標4が最初にあるとよいと思った。まず、自分の土台がしっかりして、人と関わって学び合い、その後で粘り強く学べるようになり、目標3が社会参画という内容になるのであれば、その後社会につなげるという順になるとよい。

学力・学習状況調査については、目標4だけではなく、無回答率の高さも課題となっているため、目標2にも関わってくる。1つの目標だけが関わるものではない。

他に、目標1の指標に自己肯定感と書かれているが、これは目標4に入るのではないか。逆に目標1の指標には「多様性」などが入るのではないか。

■笠原委員長

指標については、この後議論する。順位性としては今後のプラン作成の際の意見として事務局は考慮してほしい。4つの目標自体については、特に反対や追加の意見等がなかった。この4つについて、これら以外に別の視点や意見はあるか。

目標3については「社会参加」や「社会とつながる」といった視点があるとなつたりやすいという意見が出た。目標4については「生活」といった言葉があるとよいという意見があった。それらを踏まえて、事務局は次期プランの目標を定めてほしい。

■太田委員

順位性について意見を述べたい。私は今のこの順番であるべきと考える。資質・能力ベースとはいえ、学校が中心となって推進プランを実行していかなければ目標は達成できない。学習、すなわち学ぶことは学校の本分であり、学校はそのための機関である。目標3、4についても学校が意識し、地域や保護者に協力を呼びかけて成立するものである。このことから、目標1や目標2が先行することは妥当である。教師は教育のプロとして目標1から4の達成を追い求め、認知的・非認知的スキルともに高めていけば横須賀の児童生徒の資質・能力は高まっていくことを意識して取り組んでほしい。そして、学校や教育委員会はそのことを強く発信するべきで、保護者や地域に全てを委ねるのではなく、学校と一緒にやっというところの投げかけが大切である。

■宇佐美委員

私も、今の順番で納得している。主に学校が育成しようとする目標1から3があり、それに必要な情操的な部分や内発的な動機づけの部分、基礎・基本の部分が目標4にあたると捉えている。

■安藤委員

順番については今のままでよいと感じた。資質・能力ベースとはいえ、これまでの学力向上ということがベースになっている。学ぶということは学校の本分である。それであれば目標1や2は先にあるべきだろう。

目標3と4の棲み分けについては、委員長が言及したように、従来の学力調査の結果についても、今後注視していくのであれば、その全てを目標3に含めると、目標3の比重が大きくなりすぎる可能性がある。

そのため、目標4を「学びの土台となる力」のように表現し、その中に学力・学習状況調査の結果を含める形で棲み分けを提示することも可能であるとする。自らの発言ながら、現在の議論を聞くと、目標3の比重が大きくなりすぎるとも感じる。

また、目標4の「学びの土台となる力」は、共同性や社会的スキルを含むものであると理解しており、その点では納得できる。しかし、別の言葉に置き換えることも検討すべきである。学力という文脈で「人間力」といった表現を用いると、概念が広くなりすぎる可能性がある。加えて、学力・学習状況調査の結果が反映されなくなることも懸念した。以上のように、ここまで議論を迷いながら聞いていた。

目標1、2、3の下に目標4が位置し、それらが相互に連携しながら資質・能力を高めていくというイメージを持っている。以上である。

■笠原委員長

お互いに意見を交わし、理解を深めることは重要である。事務局はその意見を調整して構わない。次回、整理された内容を最終的に確認するが、ここで発言し忘れたことがないよう、各自で確認してほしい。事務局は、問題ないか。

■事務局

その方向性で問題ない。

■笠原委員長

最終確認である。方向性としてはここに示されている4つ、その中に含める文言については、提出された意見を整理するという形で進めていく。

委員からは貴重な意見が多く出た。大切なのは、このような議論が学校内で適切に行われることである。上からの一方的な指示ではなく、各教員が自身の言葉で、目の前の子どもたちをどう育むべきか、そして提示された推進プランをどのように活用すべきかを説明できるレベルまで、各学校が落とし込めるかが鍵となるだろう。

太田委員の発言にあったように、教員が説明できなければ、「何をしたいのか」「どうすればよいのか」という問いが生じ、地域や保護者の協力を得ることは困難である。したがって、不明瞭な点や曖昧な点があれば、この段階で発言してほしい。問題ないか。(各委員了承)

それでは、指標について協議する。これに関しては、先ほど小日向委員の自己肯定感は目標4の土台に含めてもよいという意見があったように、多く

の要素が関連し合うものである。

しかし、認知的なスキルを考える場合、自己肯定感は学力や学びに対して重要な要素で、教師が学校や授業の中で育むという認識をもっていなければならない。家庭や他の場で自己肯定感を育んでも、子どもたちは最終的に知識を活用する中で、自分にできること、自身の強みは何なのかという点に立ち返るのだろう。この点を踏まえて整理したい。

指標の数を最初に限定することは避ける。目標１の「学び合う集団の育成を図る」について、どのような指標が望ましいか、特にこれは不可欠であるといった形で意見を提示してほしい。

■村上委員

自己肯定感については、小日向委員と同じ印象をもった。目標４に含める解釈でよいと考えた。しかし、現行プランでは自己肯定感は目標１の指標に位置づいていたため、議論が必要である。

ぜひ、目標１に含めてほしいのは、「学ぶことのよさの実感」という指標である。これは粘り強く学ぶ力の土台となるものであり、目標４または目標２のどちらかに位置づけるべきか検討の余地がある。

学習指導要領では「学ぶことのよさの実感」は、知識及び技能に位置づけられているが、知識だけでなく、経験や達成感、すなわち「やってよかった」という感覚であり、自己肯定感にもつながるものと考ええる。このような感覚がなければ、子どもたちは困難な状況に直面した際に、挑戦する意欲やチャレンジ精神を抱けないのではないかと考える。

また、目標４の「豊かな経験」という指標は、捉え方が広範であるため、より具体化すべきである。例えば、家庭だけでなく学校も関わるのであれば、「学びを活かす生活体験」といった表現が適切ではないか。例えば理科で星のことを学んだ後に、家で夜空を観察してみるなどである。学習したことを家庭で実践するなど、家庭と学校の両面から、経験を通じて学びを深める場面を捉えていくべきである。

■笠原委員長

石井委員に伺いたい、「学ぶことのよさの実感」という表現で、具体的なイメージが湧くか。

■石井委員

難しい。今のところ想像がつかない。

■笠原委員長

西野委員はどうか。

■西野委員

難しい。達成感のようなものと認識すればよいのか。

■笠原委員長

「学ぶことのよさの実感」は、ある意味学校用語であり、地域や保護者の方が理解するのは難しいだろう。そのような言葉が必要なこともあるだろうが、多くの人がイメージでき、共感してもらえる言葉で表現することが大切だろう。体験なども同様で、学びの前の体験と学びの後の体験がある。

■小日向委員

自己肯定感は、単に自己を肯定するだけでなく、年齢が上がるにつれて根拠に基づいて自分を肯定していくものでなければならないと考える。「学びの土台」については、生活も学びも基礎や基本ができることで自己肯定感が育まれるものだと考える。目標1には「学び合う」とあったので、自分より他者というイメージをもったため疑問をもった。また、目標4は家庭に全て任せるのではなく、学校が主体的に取り組むべきであるという意見である。

また、目標1が「学び合う」ということであれば、現在の指標は「自分」を主語とするものが多いと感じる。「つなげる・つながる」という考えからすれば、他者とつながる力を測る指標が必要である。

これは他者理解や協働性といった要素を含み、1人で学ぶよりも共に学ぶ方がよいと感じる力、あるいはそれを実感できる力を測る指標が望ましいと考える。

さらに、コミュニケーション力も学び合いに不可欠である。円滑な意思疎通がなければ真の学び合いは実現しない。したがって、指標1にはコミュニケーション力や、他者を認め合う力といった要素が含まれるべきである。

■宇佐美委員

昨年度の小中一貫教育の取組で、横須賀市立小・中学校学習状況調査の質問紙調査の結果の分析に基づき、地域に合った教育について協議した。子どもの特性を考え、学力向上の方法を検討した際に目標1に関連する「協働」が重要視された。

その際、質問紙調査における自己肯定感も議論されたが、それよりも集団の中で自分が役に立ったと感じる「自己有用感」が重要なのではないかとい

う意見があった。ニュアンスは類似しているが、参考として提案する。

■西野委員

目標2の「自己調整」について、その意味を明確にしたい。自己肯定感とは異なる概念か。

■笠原委員長

事務局に回答をお願いしたい。

■事務局

現行の学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の中に「学びに向かう力、人間性等」があり、その中で「自己調整」という言葉が用いられている。これは、学びを進める上で、何が必要か、どれくらいの時間が必要か、何が不足しているかなどを自己省察し、自らを調整することを指す教育用語である。課題に取り組む際に、自ら舵をとり、方向性を定め、進捗を調整する能力のことである。各教科等において調整の仕方は異なるが、広義にはこのような能力を指す。

■西野委員

一般的に言われる自己分析に類似しているのか。

■事務局

その通りである。メタ認知など、類似の概念である。

■西野委員

了解した。しかし、これが目標2に該当するか否かは検討が必要である。

■笠原委員長

現行の学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学び」を通じて資質・能力を育むことを大きなねらいとしている。この主体的・対話的部分において、「自己調整学習理論」の中から、この言葉が用いられている。これを学習の要素に組み込むことで、目標と振り返りを意識させるのである。すなわち学習の中で自分自身を客観的に見つめるメタ認知を促す。

そのためには他者理解や相互評価といった過程も経ることで、最終的に深い学びを通じて、教科学習における見方・考え方を通して、資質・能力の獲得に至るという流れである。このような流れが、現行学習指導要領において

明確にされた。したがって、「粘り強く学ぶ力」の育成という点において、言葉の理解を得ることは難しいかもしれないが「自己調整」を加えた経緯である。

今後は、問題解決能力や探究力の育成がより求められることを意識してもよいだろう。

■宇佐美委員

目標4に関連するかもしれないが、適切な言葉が見つからない。次期学習指導要領に関する講演で聞いた話だが、主体的・対話的で深い学びを踏襲しながらも「内発的動機付け」が核となるという内容であった。自ら学ぼうとする力が土台となる力に含まれるとよいと感じる。

■笠原委員長

安藤委員は、情報の収集や発信の重要性を語られていたが、目標3の指標については、何か考えがあるか。

■安藤委員

目標3の重要性がどの程度になるかにもよるが、現時点では、全て同等の重要性を持つものと考えている。

現状のイメージでは、今後のICT活用、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、すなわち発信能力と意思疎通能力が重要であり、これらに関連する具体的な指標が望ましいと考える。現在提示されている指標にはよいものがあると認識している。

他に、目標1と目標3の関連性について、コミュニケーションやプレゼンテーション能力が、大きな集団はもちろん、グループ学習において子どもたちの相互理解や学び合い、高め合いにつながる可能性を検討すべきである。これらは目標1にも関連するかもしれない。

さらに、目標1の「学び合う集団」において、長年の経験から、学習に適した環境が整っているかどうかが最も重要であると感じる。これは基本的なことではあるが、安心できる学級集団が形成されているか、子どもたちが安心して学習に臨んでいるかといった点も指標に含まれるべきである。これにより、教員が安定した学級経営の重要性を再認識し、モチベーション向上や意識改革につながることを期待する。様々な授業を視察する立場からの意見である。

■石井委員

資料に関しては、これ以上加えることはない。しかし、議論を聞いていると、先ほど出た探究の部分が、目標4または目標3のどちらに位置づけられるかという点がある。これはあくまで大きな枠組みの話である。土台、つまり基礎となるものがあって、学校ごとに教育目標が定められる。学校教育目標は保護者が1番目にするものである。それらと連動していることが重要である。

■太田委員

目標3と目標4を新たに打ち出すということは、受け手にとっては次期プランの目玉になる。目標3をあえて提示することは、今後その必要性が増すというメッセージとなると考える。

その意味で、単に資料を作成するだけでなく、設計段階から目的や伝えたいことを明確にして深い学びをしていることが重要である。そのような学びをしていれば、結果的に学力等調査の結果によく例えられる、見える学力の数値も向上するだろう。

その他、目標が4つあると多いと感じるため、一部を他の目標へ移すことも検討すべきである。

また、目標4における「基礎・基本」という言葉は、その意味が曖昧である。認知能力の基礎基本を指すのであれば、学校の役割となるだろう。整理が難しい部分である。

目標2は項目が多いと感じており、目標3は新しい視点として提示する方が効果的であると考ええる。

■小日向委員

目標3について、外国語の授業では、コミュニケーション力やプレゼンテーション力は、流暢さだけでなく、目的に合わせ、状況に即した適切な発信力を指す。これらの能力を指標とするのであれば、その前提となる何のためという目的意識や誰のためという相手意識などの要素が不可欠であると考ええる。

また、目標3の「情報収集」において、指標がICT活用力のみに限定されている点は修正が必要と考える。

子どもたちはICTの扱いに長けているが、単に情報を得て満足するのではなく、その活用方法、例えば生成AIを適切に使う能力や、大量の情報の中から正しいものを見極める能力が重要である。情報の活用力とは、情報を賢く利用し、膨大な情報の中から適切なものや正しい情報を選択する能力の育成が必要になってくる。この点を明確にしなければ、言葉だけが先行し、

教員が単に I C Tを使えばよいと誤解する可能性がある。むしろ、図書館にあるような信頼性の高い文献にも到達できる能力も必要である。もしそういった指標があるのであれば、ぜひ提示してほしい。

■村上委員

目標 3 の「社会参画」という要素をぜひ取り上げてほしい。

その他、「探究」という言葉は広範であり、目標 2 におさまるものなのか疑問をもっている。探究学習のステップは、課題の設定、情報収集、整理分析、まとめ表現である。この資料では明記されていないが、I C T活用力の中に整理分析が含まれるのか疑問をもった。

探究学習の各ステップが明確に示され、その学習を通じてこれらの力が自然に身に付くことが保証されるような構成であれば、探究的な授業を行う教員は安心して取り組めるだろう。

■西野委員

先の小日向委員の発言に共感する。例えば、授業でも取り組んでいるプレゼンテーション資料作成力は、将来的には重要度が低下する可能性がある。生成 A I を活用してプレゼンテーション資料を作成することが広がっている社会において、資料を自力で作成する力が今後とも必要とされるのかは疑問だからだ。

生成 A I 時代の学びという意味では、「問いを立てる力」が重要だと考える。これは、問いを立て、情報収集し、何が正しい情報かを見極める力ということである。その力をどのように身に付けさせるかが、これからの学校にますます求められるだろう。

■笠原委員長

議論が逸れてしまうが、生成 A I の進化は目覚ましい。必要な情報を入力するだけで、驚くべき速さで処理が進む。日進月歩どころか、その速さに驚いてしまうほどである。1 度使うと止められなくなるほど恐ろしい存在である。しかし、西野委員が指摘したように、本当に必要なのはプレゼンテーション力なのかという点を含めて、今後も検討が必要である。

各学校の教員は具体的な方法に意識が向かいがちだが、そもそも何のために児童生徒が情報発信を行うのかという原点に立ち返るような問いかけができればよいと考えている。

■西野委員

太田委員の「自分たちは教育のプロとして」という発言に共感した。今後は、生成A Iが様々な答えを出す時代において、そもそも「なぜ学ぶのか」という問いや「なぜ学校が存在し、なぜ学校で学ぶのか」という根本が、より一層問われるだろう。

私自身、ビジネスの現場で日々生成A Iに接しているため、この点を強く感じる。これからの教育では、学校で学ぶ意味、資質・能力を身に付ける意味、そして自ら学ぼうとする力がなぜ必要か、という点が問われるだろう。議論が本題から逸れたかもしれないが、これは重要な点である。

■笠原委員長

常に本質に立ち返ることが重要である。そもそもなぜこのような議論をしているのか、子どもたちに何を問いかけたいのか。私たち自身がその問いを深めながら、ここで言葉を選んでしていると捉えている。

事務局に確認したい。現状では、諮問の3つ目における方向性と指標の確認について、太田委員から「4つは多いのではないか」という意見が出ているが、どうか。

■事務局

現在ご発言いただいている内容は、指標を具体的に作成する上でのキーワードになると考える。これらをどのように組み合わせるか検討する。委員長が最初に述べたように、その中でも特に不可欠な要素に焦点を絞っていただくことは、大変ありがたい。

■笠原委員長

最後に、ここだけは外してはならないという点を述べてほしい。

■村上委員

先ほどの西野委員から「分かりにくい」という発言もあったが、あえて「学ぶことのよさの実感」こそが重要であると考えます。

学校で学ぶ意義、家庭で学ぶことが可能なことも、なぜ集団で学ぶのかということを児童生徒に実感してほしい。今の時代だからこそ、学校での学びのよさを理解し、その価値を実感する必要がある。そのような意味で「学ぶことのよさの実感」は、ぜひ共有できるものとしたい。

■西野委員

先ほどはイメージしにくかったが、今の村上委員の発言から、具体的に想

起できるようになった。

■太田委員

それならば、そこには「共に」が入るとなおいだろう。

■村上委員

共に学ぶ、まさにその通りである。共に学ぶことで、1人で学ぶ以上の成果が得られるだろう。学校では、個人で学びを深める場も必要であるが、どちらに重きを置くかで、どの目標指標とするかが決まるだろう。

■笠原委員長

人とは、関わり合うことによって何かが生まれる存在である。「授業とは端的に言えば関わり合いである」と述べた教育学者がいる。それは友達との関わり合い、教員との関わり合い、教材との関わり合いを指す。このような要素が「関わる」という言葉に凝縮され、授業は関わり合いであると定義された。今から30年以上前の言葉であるが、シンプルでありながら、いつの時代にも通用する普遍性がある。このような視点で、誰もが納得する言葉で表現していくことが必要であると考える。

■西野委員

横須賀市の地域性、そして昨今の様々な状況を考慮すると、他者理解は重要だろう。具体的な指標への落とし込みは難しいかもしれないが、教育において不可欠な考え方ではないか。

■笠原委員長

多様性については、第1回の中で、どなたかの発言にもあったと記憶している。

■西野委員

横須賀市の人づくりで掲げられている「あなたが好き」という言葉の中にも、まさに他者理解の要素が含まれている。

■小日向委員

自己調整という言葉の難しさについてだが、学習指導要領の説明をする中で「舵取り」という言葉が出てきた。自己調整力を「舵取り力」とすると、これはよい表現であると考える。「舵取りをする」という表現は、海や船に

関わりの深い横須賀市にも合致し、一般の人にも伝わりやすく、よりよい表現であると考える。

■笠原委員長

それでは、皆様から出された意見を次回までに答申案として事務局でまとめてほしい。12月8日の会議までに1度皆様と共有し、そこで意見をいただく形でよいか。メールでのやり取りも含むか。

■事務局

12月8日に向けて、メールなどでご意見を伺いたい。

■笠原委員長

約1ヶ月の期間がある。その間に事務局が意見をまとめ、やり取りを進めることになる。次回の全体会議までに円滑なやり取りが確実に行われるよう、協力を願う。

それでは、第3回横須賀市学力向上推進委員会を終了する。

令和7年度



第3回 横須賀市 学力向上推進委員会

令和7年（2025年）10月28日（火）

教育研究所 第2研修室

【次第】

1 開会

2 教育指導課長あいさつ

3 協議

（1）本委員会の今後の日程等について

資料1

（2）答申に盛り込むべき内容について

資料2

①本市が目指すべき「学力」とはどのようなものか

②新たな重点目標の設定について

③次期プランの進捗管理に相応しい指標について

4 連絡

5 閉会

令和 7 年度 学力向上推進委員会の取組について（案 3）

1 今年度の取組の内容について

現行「横須賀市学力向上推進プラン」の期間満了に伴い、これまでの成果と課題を踏まえ、次期プラン（令和 8 年度～令和 11 年度）を本年度末までに策定する予定です。本市では、「学びあう集団の育成」「粘り強く学ぶ力の育成」「学力層全体の引き上げ」を目標に横須賀市学力向上推進プランを推進してきました。現行プラン期間に、主体的な学びの定着など一定の成果が見られた一方、学力等調査の教科調査の正答率が全国水準に届かないなどの課題も残っています。令和 8 年度～令和 11 年度に実施する次期プランの方向性について、横須賀市学力向上推進委員会の専門的な視点から審議をお願いします。

教育委員会は、貴委員会の答申を受けて、改めて検討を行い、令和 8 年度～令和 11 年度に実施する次期プランを策定します。

2 年間予定

本年度は次の内容で実施する予定です。

	日時	協議内容等
第 1 回 (終了)	令和 7 年 7 月 23 日 (水) 15 : 00～16 : 30	横須賀市が目指すべき「学力」とはどのようなものか I (諮問 趣旨①)
第 2 回 (終了)	令和 7 年 9 月 9 日 (火) 14 : 30～16 : 00	横須賀市が目指すべき「学力」とはどのようなものか II (諮問 趣旨①)
第 3 回	令和 7 年 10 月 28 日 (火) 15 : 00～16 : 30	「答申」に盛り込むべき内容について
第 4 回	令和 7 年 12 月 8 日 (月) 15 : 00～16 : 30	「答申」を決定する
第 5 回	令和 8 年 2 月 9 日 (月) 15 : 00～16 : 30	次期プランの全体像の確認等

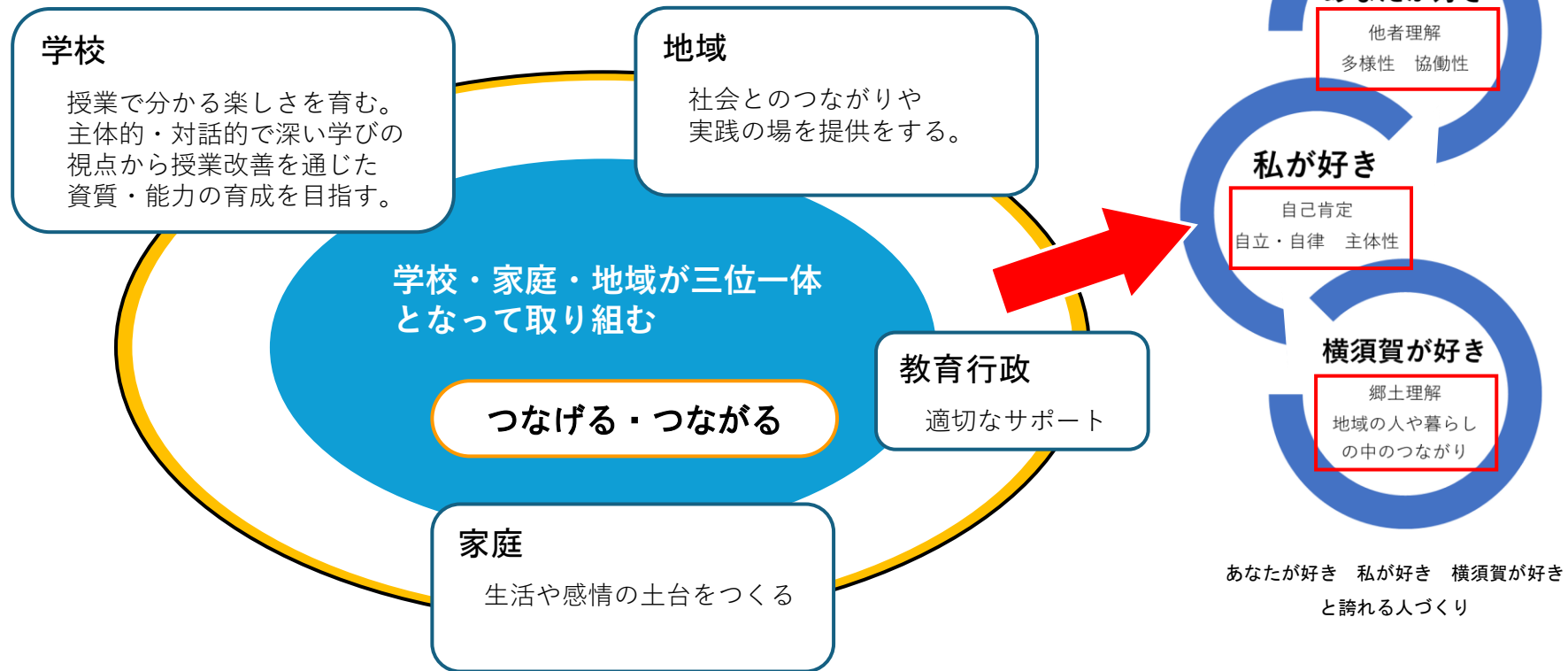
※開催場所は教育研究所第 2 研修室です。

答申に盛り込むべき内容について

これまで「学力」については、教科内容（特に国語、算数・数学等）に即して形成される認知的な能力に限定しがちであった。改めて、児童生徒の多様性を踏まえ、其々のよさが生かされるためにも、今後は「学力」をより総合的に捉え、児童生徒にとって必要な知識やスキル、情緒（態度及び価値観）を要素とした「資質・能力」ベースの考え方に基づいて、非認知的な要素（コミュニケーションと協働等の社会的スキル、自律性、協調性、責任感等の人格的特性・態度等）も含め、教科横断的な資質・能力の育成を目指す。

横須賀が目指す教育の姿

今回の「プラン」の基本的な考え方は、「学校・家庭・地域が三位一体となって取り組む」ことで、児童生徒の資質・能力を育成し、横須賀市が目指す教育の姿の実現を目指す。その際、其々が担う役割は、□の中に示したものであり、キーワードを「つなげる・つながる」とし、「教育行政」が全体をサポートする。



目標 1

学び合う集団の育成を図る

指標：「主体的・対話的」
「自己肯定感」

目標 2

粘り強く学ぶ力の育成を図る

指標：「問題解決」 「探究」
「自己調整」 「選択」

目標 3

情報収集・発信する力の育成を図る

指標：「ICTの活用力」
「コミュニケーション力」
「プレゼンテーション力」

目標 4

学びの土台となる力の育成を図る

指標：「基礎・基本」
「豊かな経験」

諮問①に関すること

- ・これから「学力」については、「資質・能力ベース」の考えに基づいて捉える。
- ・「横須賀が目指す教育の姿」に示されている資質・能力と関連を意識し、学校・家庭・地域が三位一体となって児童生徒の資質・能力を育成する。

き 内 容 に つ い て

これまで「学力」については、教科内容（特に国語、算数・数学等）に即して形成される認知的な能力に限定しがちであった。改めて、児童生徒の多様性を踏まえ、其々のよさが生かされるためにも、今後は「学力」をより総合的に捉え、児童生徒にとって必要な知識やスキル、情緒（態度及び価値観）を要素とした「資質・能力」ベースの考え方に基づいて、非認知的な要素（コミュニケーションと協働等の社会的スキル、自律性、協調性、責任感等の人格的特性・態度等）も含め、教科横断的な資質・能力の育成を目指す。

横須賀が目指す教育の姿

今回の「プラン」の基本的な考え方は、「学校・家庭・地域が三位一体となって取り組む」ことで、児童生徒の資質・能力を育成し、横須賀市が目指す教育の姿の実現を目指す。その際、其々が担う役割は、□の中に示したものであり、キーワードを「つなげる・つながる」とし、「教育行政」が全体をサポートする。

学校

授業で分かる楽しさを育む。
主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を通じた資質・能力の育成を目指す。

地域

社会とのつながりや実践の場を提供をする。

学校・家庭・地域が三位一体
となって取り組む

つなげる・つながる

教育行政

適切なサポート

家庭

生活や感情の土台をつくる

あなたが好き

他者理解
多様性 協働性

私が好き

自己肯定
自立・自律 主体性

横須賀が好き

郷土理解
地域の人や暮らし
の中のつながり

諮問②に関すること

- ・次期プランの重点目標を設定する上での方向性として、ここに示している4つの視点（集団の育成・個の力・情報活用・学びの土台／豊かな経験等）を中心に検討する。

諮問③に関すること

- ・進捗管理に相応しい指標にするために必要なことを確認する。

目標 1

学び合う集団の育成を図る

指標：「主体的・対話的」
「自己肯定感」

目標 2

粘り強く学ぶ力の育成を図る

指標：「問題解決」「探究」
「自己調整」「選択」

目標 3

情報収集・発信する力の育成を図る

指標：「ICTの活用力」
「コミュニケーション力」
「プレゼンテーション力」

目標 4

学びの土台となる力の育成を図る

指標：「基礎・基本」
「豊かな経験」

あなたが好き 私が好き 横須賀が好き

と誇れる人づくり